

# KENKEN

OPU Architectural Review 2023

vol. 2

KEN KEN  
vol. 2

OPU Architectural review 2023

OPU Architectural Review 2023



2021

2022

2023

# 2023 | あはひ

「あはひ」とは日本の古語であり  
もの間、人との間柄、色の調和、時の流れ  
を表すひどく曖昧な言葉である

コロナ禍を乗り越えた今年度は昨年度以上に  
場所に赴き、人と関わり、未来についての学びを深めた一年だった

それは、私たち自身とそれ以外の交わり、つまりあはひが増え  
ひとりひとりがもつ色がより混ざりあった一年でもあった

私たちはこの先も、赴き、関り、学んでいく機会を増やしていく  
あはひを増やし、自身の色を深め、混ぜ、豊かに描いていくために

## contents

- |              |    |
|--------------|----|
| 1. 教員インタビュー  | 02 |
| 2. 学生生活      | 06 |
| 3. 設計課題・演習課題 | 10 |
| 4. 卒業制作      | 26 |
| 5. 建築サロン     | 34 |
| 6. 講評会       | 36 |
| 7. おわりに      | 38 |



interviewer 剣持 信彦

津田 勢太 / Tsuda Seita

1992年 京都大学工学部建築学科 卒業  
1994年 京都大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程 修了  
1994年 日建設計(株) 構造設計部  
2002年 津田勢太構造設計事務所  
2010年 現在 岡山県立大学 デザイン学部

今回のインタビューでは先生の学生の頃や大学で先生をする前のことや印象的な思い出について聞いていこうかと考えています。

津田 授業にはほぼ出てなかったのが授業のことは何も覚えてないなあ、全く出席を取らない大学だったから。設計演習だけはみんな必死に頑張ってる、大学には製図室に行くときくらい。二年生の時には製図室に夜な夜な集まってわいわいがやがや議論しながら楽しくやってたけど、三年生になって家に製図台を買ってから製図室にもあまり行かなくなっちゃって、それは後悔。四年生になるとゼミに配属されるけど、まずは院試の勉強を半年間かなり頑張った。それまでまったく勉強してなかった

ので大変だったけど、勉強は結構楽しかった。院試が終わったらあとは卒業研究をなんとかまとめたけど、基礎ができてないから困ったね。修士になってからは心を入れ替えて朝から晩までちゃんと研究してたよ。ひとつのことにのめり込んで朝から晩までできるのは楽しかったし、いい時間だった。切羽詰まってやらなきゃいけないからじゃなくて、毎日楽しいからやってたんだよな。M1(大学院生1年)のときに色んなことに手を出して一カ月、二カ月と、がーっとやったベースがあって、M2の修士論文に役にたった。その学びたいことやしたいことって何だったんですか？

津田 M1は主にプログラミング。英語

の論文を読解しながら計算プログラムを作成したり、それとは別に画面上で3Dモデルを作図するプログラムだったり。あと旅行もいっぱいした。ヨーロッパに2カ月くらい行ったり。フランス、パリ、イタリア、ギリシャ、スイス、スペインの順で行ったかな。ギリシャでは路上でおいしい話に飛びついて、ついていったら怪しげなバーで。お姉さんまで出てきてお酒おごってと言われて、やっと騙された気づいて焦った。10万円はとられるかと思ったら請求はたったの7000円位。ムカついたけど、ほっとしたよねー、いい経験させてもらえた(笑)。被害が少なくてよかったですね。ヨーロッパには何をしに行ったんですか？

津田 パリにおばちゃんが住んでたの

で、まずパリを楽しんでからレンタカーで南仏旅行。いろんな建築見に行ったけど、ぎちぎちに旅程を組んだ建築旅行でもなく、割といきあたりばったり。建築学科の人は限なく調べて行くところを、僕はいい加減だったんであんまり……。例えばフォロ・ロマーノ。その存在は西洋建築史の院試の勉強での記憶しかなくて、その時勉強した本に載ってたのはスケッチだけ。コロッセオや凱旋門も見た後に、休憩しようと思った鬱蒼とした公園をしばらく歩いていたら突然バンッとフォロ・ロマーノが現れて。そこで初めて「うわ、これ勉強したところだ」って気づいて、まじで感動した。あれ、普通に表から入ってたら、あんな感動しなかったと思う。俺らが使ってた西洋建築史図集っていう本は、ちいさい白黒写真と平面図くらいしかないから、本物を見るのは価値があるよね。今の人は情報がたくさんあって、とてもきれいな写真やビデオが見れるから、そんな体験は難しいよね。ある意味かわいそう。ヨーロッパはひとりで回ったんですか？

津田 基本ひとりだけど、いろんな所で友達と合流してね。イタリアは一番親しい友達と行った。その友達とはローマ空港で待ち合わせてただけど、行く前になんか食べたくなってバーに行ったら隣のおっちゃんと意気投合しちゃって。まあいっか遅れてもと思って(笑)。結局2時間くらい遅れて着いて、友達は空港でイタリア語で話しかけられても分らんし、怖かったらしい。その後、会うたびに、あれはひどいって言われるよ。そりゃそうですよ(笑)。そんな津田先生ですがこのデザイン学部で先生してるきっかけって何ですか？

津田 偶然っていう感じ。日建設計を6年で辞めた後、イタリアに1年くらい遊びに行って帰ってきて、京都で設計事務所をやってる友達と一緒にいくつか設計して、この期間はすごく楽しかったけど、いろいろあって1年で辞めて。その後は大阪で個人的に仕事をしながら、研究も再開した位のとときに、日建設計の会社の先輩になんかのパーティーで会って近況報告した2、3年後かな。「岡山県立大学で構造の教員を公募してるよ」ってメールを送ってくれて。それまで研究したり、関西大学などで非常勤講師やってたりして、教えるのも面白いしってことで、なりゆきと勢いで。でも、ここに14年間もおるとは思わなかった。最初は田舎生活に退屈してたけど、自転車を趣味にしてからは山川海が近くあって走りやすいし、とても好きになっちゃった。今までの話聞く感じだとまたどっか行きそうな感じしますけどね(笑)。県大に来た時はどんな印象でしたか？

津田 そのころは教員もまとまりがなくて、それぞれが勝手にやってる感じ。今はみんな意思疎通がよくできて、学科を良くしていくためにどうしていこうかって良く話し合ってる、居心地いいよ。学生にもそういう雰囲気は伝わるよね。学生とは以前は、いろんな所行ったり、

飲みに行ったりしてたけど、最近はなんでか学生とちょっと距離感があるな。京大のゼミでは毎日2時間くらいお茶タイムがあって、研究したいのに苦痛やった。夜になったら違う先生が酒飲んでやってきてまたグダグダしゃべるみたいな。そんなこともありつつ、徹夜して朝帰りとかかみたいな濃厚な大学院生活もいい時代だったよね。今ではちょっと考えられないよね。では最後に長く岡山県立大学にいる津田先生から見て、県大の生徒の特徴って何ですか？

津田 基本、県大のカラーって真面目で素直なんだけど、今の3年生だけはなんか変人揃いだよね。まず、大学の授業も真面目に来ないし、ひと昔前の京大みたい(笑)。建築学科1期生がこれかーってなったけど、でもその3年生の変人カラーは逆に期待が持てるもする。実は楽しみにしてたり。また2年生、1年生もそれぞれ別のカラーがあって、どうなるんだろうね。今の4年生は入学時にコロナで大変だったけどとても優秀で、デザイン工学科最後の学生として足跡を残したと思う。建築学科になって質が落ちたと言われないよう頑張ってるよ。そうします(笑)。今回はありがとうございました！



## 向山 徹 / Mukouyama Toru

1983年 東北大学工学部建築学科  
1985年 東北大学工学部建築学専攻修士課程  
1985年 清水建設(株)設計本部  
1993年 清水建設(株)広島支店設計部  
2000年 向山徹建築設計室  
2006年 広島工業大学非常勤講師  
2012年 広島工業大学建築工学科  
2019年 岡山県立大学デザイン学部 デザイン工学科

今回のインタビューでは先生の学生の頃や大学で先生をやる前のことや印象的な思い出について聞いていこうかと考えています。

**向山** 思い出なあ…。記憶があんまりないんだけど、入りたての頃は高校の時に乗ってたバイクで事故して、次の年免許不携帯と左折違反で捕まったり、新入生歓迎会で一升飲んで桜の枝の木をオーバーヘッドキックしたりバスの時刻表を支えている重りのコンクリートの塊を引きずって持って帰ろうとして足の指怪我したこともある。そういうことしちゃいけないのんだけど酔っぱらってたから  
そういうことしちゃいけないのよ？いけないのんだけど酔っぱらってたから

なあ…。  
開始早々大分やんちゃだったんですね  
そんな1、2年生の頃に比べて、3、4年生では何をしたんですか？

**向山** 3年生では初めて建築の勉強をして、4年生で研究室に入るんだよね。3年生の学部時代っていうと課題設計が始まって、設計は1年で4つのみであとは卒業設計なんよね。俺が行ってた東北大学って設計が一番へたくそだと先輩から言われて「お前絶対設計行かない方がいいぞ」って言われてたし、俺も構造がいちばん好きだったから施工か構造に(将来は)行くつもりだった。構造が好きなきっかけは何ですか？

**向山** 昔、舗装道路がなくて石ころだらけだったから、チャリンコがそこ

を通るときにこうタイヤのゴムが凹むじゃん。そのゴムが凹むのを見るのが好きだったんだよ。で、俺が自転車走ってる時にタイヤのゴムがどれだけ凹んだかどうか2、3歳下のチビに確認してくれて言ってたな。それがきっかけ。

面白いきっかけですね…。当時の設計課題では苦戦されましたか？

**向山** いや課題設計は意外とできとったような気がする。最初の課題は住宅設計だったけど、新建築とか当時なかったから、本屋行って家づくりのための一般誌の安い本を買ってきて、それ見ながら作ってた。センターコアのプランなんだけど、ど真ん中にキッチン、コアがあってその周りを回るようなや

つ。思い返せば、回遊するプランみたいなやつは「岩国のアトリエ」でも使った。次の課題は民族博物館。それはね、丸と長方形が組み合わさった変な形なんだけど…換気扇みたいなやつを造ったね。次が小学校かな。雁行型の建築だった。最後が音楽ホール。音楽ホールは神殿のような古典的なやつを造ったけど音響的に全然だめだってえらい剣幕で怒られた覚えがある。

で、4年生で研究室に入るんよ。行きたかった構造の研究室ってゼミが厳しくて大変だっというのを聞いたから、毎週のゼミがない歴史意匠研究室に入ったんだけど…騙された。東北地方のあちこちの民家や社寺仏閣の実測調査したんだよ。これがハードでハードで。調査で集落に泊り歩いて。大学院になったら四年生連れて行ったり、近くの東北工業大学の学生も手伝いに来てくれるから一緒に連れてって、集落の中を手分けして調査してた。3年間で100棟以上調査してたかな！

みんなが卒業旅行行ってる間も教授に「向山君、一つ建物を調査してくれんか。30万払うから」って言われたんで「やります」って一人で調査してた。あともらったお金で同じ研究室の後輩達に大盤振る舞いして先輩らしいことしたりしてたな。あとは卒業設計かな。当時の卒業設計ってインクで描くのが主流なんだけど好きじゃないから鉛筆でずっと描いてた。

就職でどこに持って行ったんですか？

**向山** ゼミの先生がたまたま就職担当で、先生が薦めたやつで2ヶ所受けたのよ。その先生が最初に受けろって言っ

たのが三菱地所の設計ね。先生にどういう風に受けたいか聞いたから「自然体でいいよ」って言われたから、図面は丸めたまま、白い半袖のシャツで受けて、面接も正直に答えたんだよ。この時、なんか受かったような気がしてね。これいけんぞってウキウキしながら帰ってきたんだけど、もう次の日落ちたっていう連絡が先生のところに行っただよ。で、次が清水建設の設計だね。今度はスーツ着て、卒業設計と実測調査の原画を30枚持って行った。でも、清水受けた時はすごいやつしかいなかったから受かったとは思わなかったよ。そこでは教養試験と実技と面接審査があって、色々終えて内定の連絡もらった時は、これで給料貰えるっていうのが嬉しかったね。  
入社してから清水にはどれくらいいたんですか？

**向山** 8年本社、6年支店で合計14年間だね。あの一回も休暇を取らなかった支店での地獄の3年間を含めて。本社に入って最初の1年～2年は実務してたけど最後の6年間はコンペしかしてないね。営業設計や国際コンペなど。だから、支店行った時は実務ができなくて苦労したな。

その時のコンペで印象的なものってありますか？

**向山** 最終的には磯崎さんがとった奈良ホールコンペを、留学でやってきたウクライナ人と二人でしたことがあったのよ。俺英語わかんないけど旅行行ったり、意見交換したりしながらやったんだよ。例えば、ウクライナ人と奈良に行って敷地見た時、ここに

はなんのコンテキスト、つまりその場所から読み取れる秩序が無いって彼が言ったら、俺は「いやあるよ。君には見えないだけでインビジブルコンテキストがあるよ。」って言い合ってたな。面白かったけど最終的に社内コンペで設計本部長のところに俺と彼の案を持って行ったら、彼の方が選ばれた。で、作業するときに俺が奴隷のようになって彼の手先になった。彼が「CGはできるのか？」って聞いたからCG並みに細かい図面を手書きで描いたら、彼がめっちゃ驚いてたのを憶えてる。こんな感じで、大学時代は調査をひたすらやったこととコンペが今に繋がっていると思う。調査ではひたすら調べて描いて、コンペではひたすら一日一個平立断模型を半年間ずっと作るっていうことしてたから手が自然と動く。目の前のことをちゃんとやる、それが大事なんじゃねえんかな。  
そうですね…自分も着実に一個一個終わらせていくようにします。

**向山** だめだったらまたやればいい。真剣にやってたとしてもすぐできるものじゃないよってことを自覚しとかんと。とりあえず目の前にあることを一生懸命にこなさいよ。あんまり深く考えず。いい意味で自分を持たずに素直に。  
難しいこと言いますね…。でもしっかり覚えておきます。今回はありがとうございました！





いっしょいっしょ

# 1ねんせい



はじめてのがっこう！一人で行けるかな？  
1年生のおともだちの思い出を振り返ろう！



初めてのおつかいできたよ！

ご飯食べれたよ！



即時通知 ⚠️ BeReal になる時! ⚠️  
2年生の写真を見て友達との思い出を振り返ろう！

2:00





イッキセイ  
がっか：けんちく  
がくねん：3

ショウライ がしょうぶを しかけてきた!  
▶せっけい しんがく  
せこう りゅうがく  
けんきゅう かわす

ステータス  
せっ(丸)りよく：70  
たいりよく：40  
かしこさ：20  
なかのよさ：100  
Ex：7210XX

### サイゴノイチネン

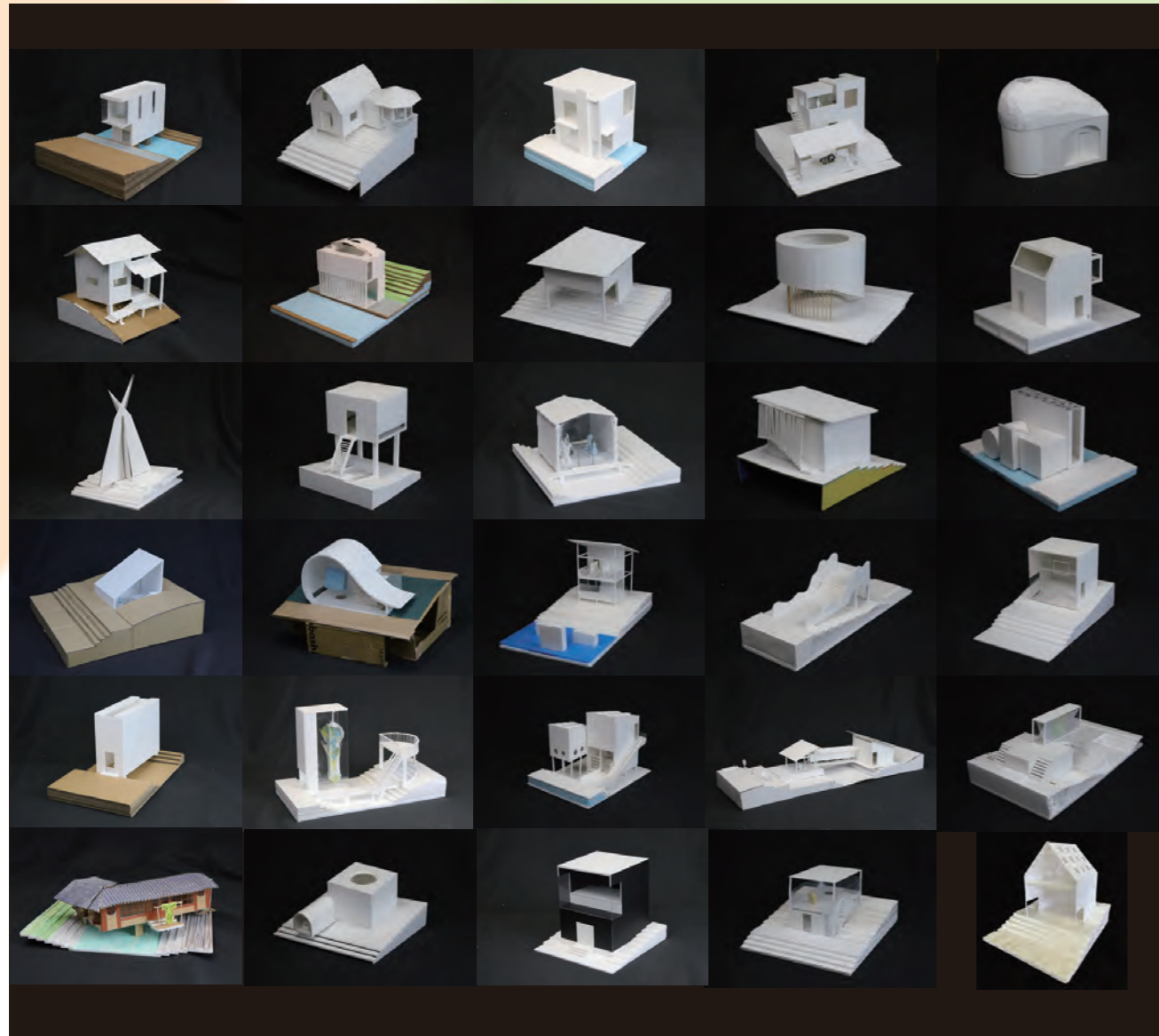
コロナ禍で始まった私たちの大学生活。ついに”最後の一年”が終わった。  
他学年に比べ「仲が悪い」と言われてきた私たちの学年だが(笑)、  
卒業論文・卒業制作を経てグッと仲が深まった一年だったのではないだろうか。



Congratulations on your graduation!

# Art with Architect

芸術家を選択し、 作品に合わせた建物を創造する



1年 建築設計基礎 I

# FOLLY

3種類の異なる大きさの立方格子を組み合わせ、空間を作る



1年 建築設計基礎 II 10-11

## 住宅

岡山県立大学の敷地を調査し、自分の想定した家族の生活が豊かになるような住宅を大学内に設計する。周辺環境との関係から導かれる居住空間と構造を意識した設計手法を図面と軸組模型で表現する。

## For Rest

岡田 結菜 / Okada Yuina

コンセプトは森の中にひっそりと建つリラクセスできる住宅。

自然のさまざまな要素を五感でダイレクトに感じるために、住宅と自然の境界を曖昧にした。ただ、プライベートな空間にはしっかりと境界をつけ、リビング兼共有スペースは境界をなくすことで空間にコントラストをつけた。人が集まり交流する開けた部分は完全に外にし、交流しやすく自然を感じられる気持ちの良い新しい住宅の形を考えた。

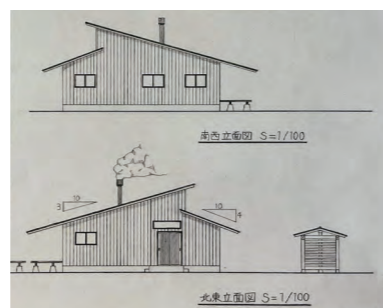
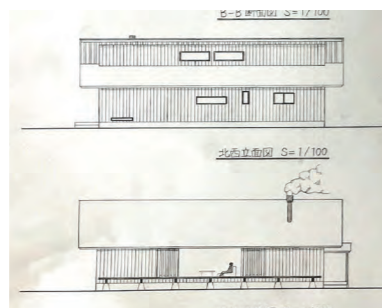


## 自然に寄り添う平屋

高木 蒼 / Takaki Ao

メインとなる樹木であるタブノキと隣接する指掛け屋根の平屋建て住宅。計画地にポツンと生えているタブノキ、河川沿いに生えている2つのソメイヨシノによって住宅にいながらも肌で自然を感じることができる。

各個室は全てLDKを通して入るので家族間のコミュニケーションをとることができる。北西側には高窓、南東側には大きな開口があることでリビングは日光・風が心地よい空間となる。



## 保育園

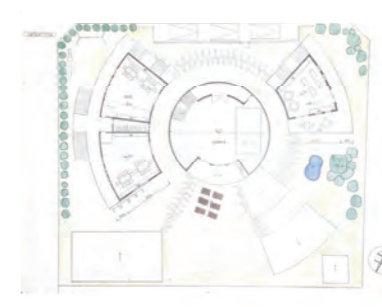
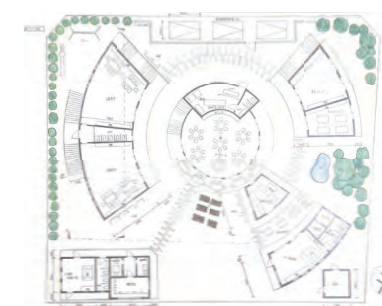
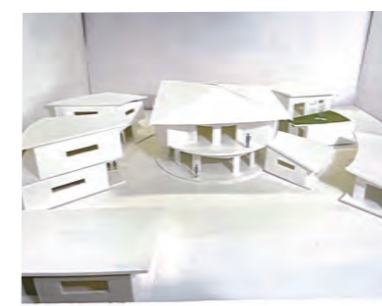
岡山県立大学の服部駅側に隣接した敷地に新しく保育所を建設する計画。親たちが子供の生活の一部を安心して任せられ、子供たちが健やかに成長できる施設を考え、都市計画に先行し、独創的で魅力的な保育所を提案する。

## すくすく保育園

河村 春菜 / Kawamura Haruna

食育とコーナー保育を掛け合わせた保育園。現代の子供たちに不足している他者とのつながりや個人を尊重した保育でのびのびと過ごせる第2の家となるような空間を目指した。

全体を駆け巡る構成、それに沿うように配置された専用室(ままごと・ものづくり・図書)。外へのアクセスも容易で好きな時に靴を履いて遊ぶことができる。ランチルームの近くには畑や調理室があり異年齢の幼児たちが協働を通じて交流する動線がある。



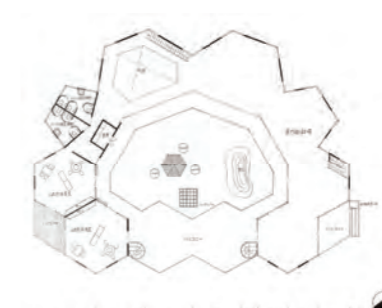
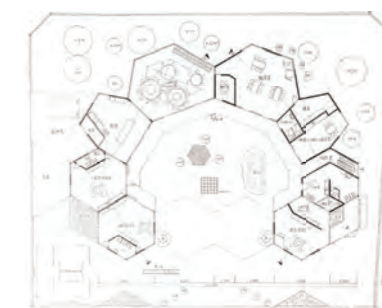
## 六芒星が結ぶ保育園

本行 千夏 / Hongyo Chinatsu

園の外で遊べる場所が少ない現代において、園内で遊びが完結しつつ外の世界と繋がる保育園をコンセプトに設計した。

六角形の部屋が輪のように繋がることで、どこからでも園児の姿を見ることができ、子供たちは互いの気配を感じながら成長する。

大きな窓が連続する全体の構成が内外の穏やかな繋がりを生み出す。バルコニーと屋内遊技場を一周できる2階や屋上庭園が園児の生活を彩る。





## まちの駅

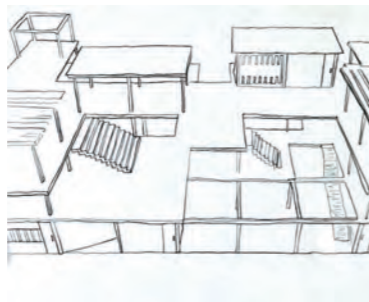
津山市の城東地区と城西地区の間に位置する商業地区エリアの城東地区西側に面した敷地を想定し、2つの顔をつなぎ、まちの顔となる、地域交流機能を併せ持たせた、「まちの駅」を計画する。

交わる表裏、流れるように。

井本 海希 / Imoto Mizuki

表と裏。この対極の概念が交われば、建築と人、またはそれら各々の関係は広がるだろう。

地産地消の飲食店やチャレンジショップを兼ねたラウンジなどの主要施設が位置する1階。津山城と宮川をGL+5.5mから見渡せる2階。この2層をつなぐ階段の踊り場を拡張し、大きな余白となる1.5階。これら3層が4m×8mの軸組ユニット12個によって緩急が流れる様な空間につくり上げる。

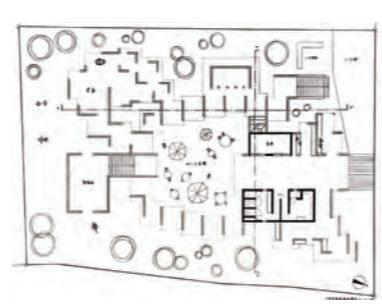


## にぎ和う静寂

河原 佑芽 / Kawara Yume

地区が分かれたことにより賑わいを失った場所で、新しい「人々の関わり」を生み出すことは難しい。しかし、今存在している小さなコミュニティがそれぞれで静かに集い、ただ、とある空間を共にする大きなひとつになれば、和やかな賑わいの輪を作り出し関わりを生むことができる考えた。

外空間は格子で仕切られた自由に使うことのできる空間を多く設けることで、孤立しすぎず様々な賑わいを見せる。



## 幼老複合施設

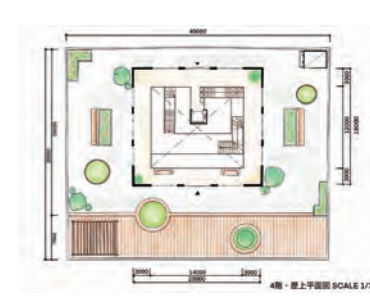
総社市駅前にある敷地に「幼老複合施設」を設計する。「これからの地域福祉を担う新たな拠点」として地域にとってどのような存在になっていくのか、これまでの福祉施設の枠にとらわれない魅力的な建築を提案する。

## そうじゃ見守りの場

小室 彩音 / Komuro Ayane

「施設利用者と地域の人々が互いに見守り、支え合う」ということをコンセプトに、利用するお年寄りや子供たち、スタッフ、地域の人々など誰にとっても居心地がよく、自然と交流が促されるような地域に根付く施設を設計した。

1階にガラスを多く用いた外観は、内部の楽しい様子を外に伝えると同時に、周辺の通学路をシェードランプのように柔らかく照らし、人々に安心感を与える。

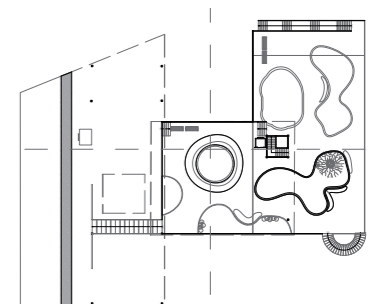
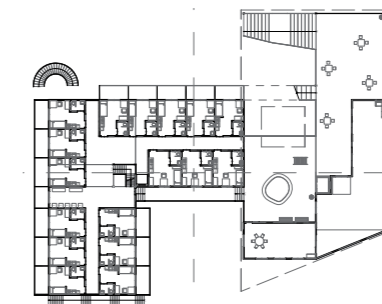
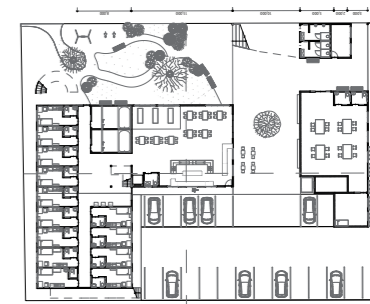


## まちのみち

川口 葵 / Kawaguchi Aoi

行き止まり、よどみを無くし、建築自体が地域にとっての『道』となる。人が留まるのではなく、滞りなく流れることで新たな交流を生み、賑やかな地域の居場所を設計した。

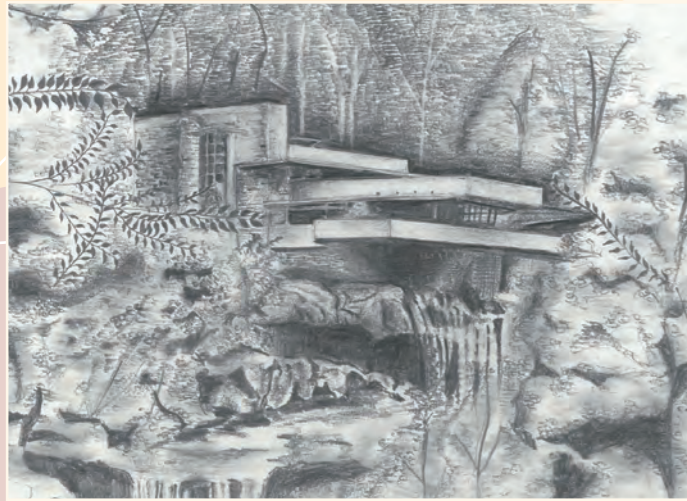
デッキを中心にデイサービス、サ高住、子供施設を配置することで、デッキが通路でもあり交流が生まれる共有スペースとなるようにした。1階から3階まで周り歩ける設計にすることで建築がまちのみちとなり、交流を生み出す媒体となっている。



建築を計画することの初歩的な考え方について、建築空間のはじまりについての認識を深め、キーワードとなる言葉を手掛かりに歴史的名作における最終的な建築形態に至るまでの道筋を探り、建築を計画するための多様な手法を学習した。授業毎に授業内容のまとめと感想の記述、スライドの模写を行った。

## 落水荘

森田 野々香 /Morita Nonoka



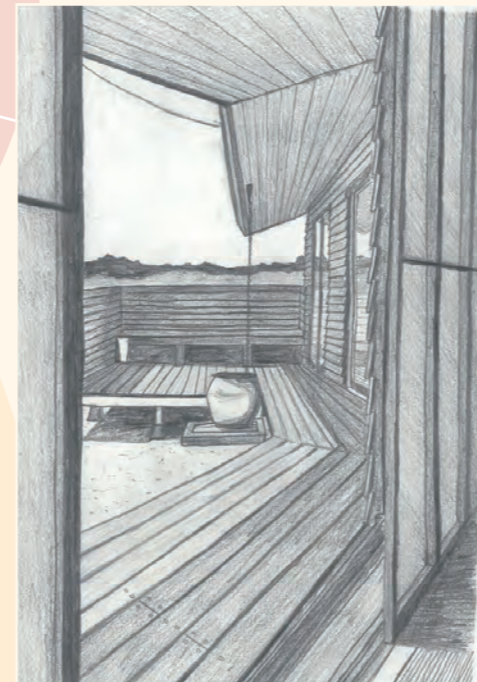
## スカラレジア

本行 千夏 /Hongyo Chinatsu



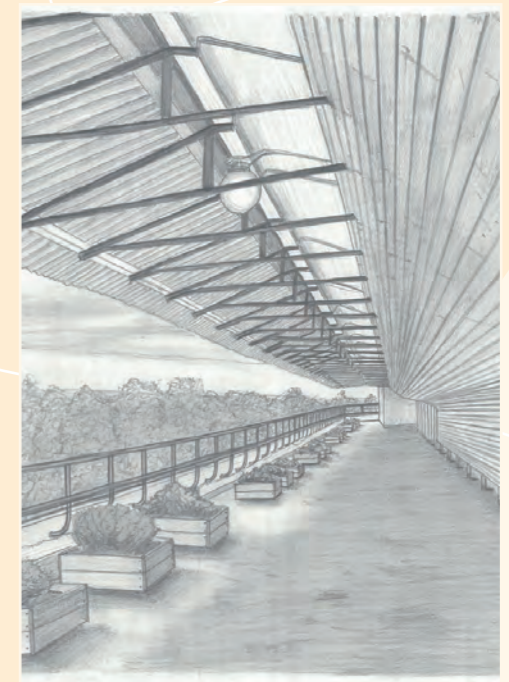
## 田口の家

河原 佑芽 /Kawara Yume



## パイミオのサナトリウム

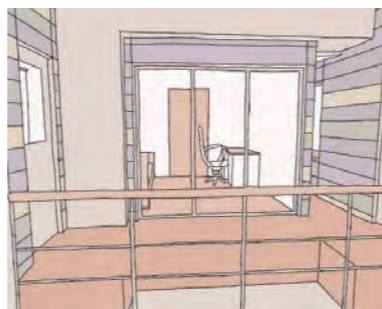
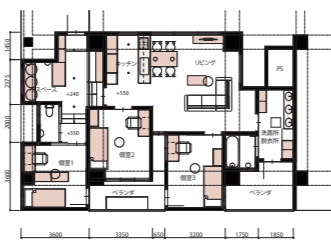
小原 凜 /Ohara Rin



## COMODO HOUSE

高田 実希 / Takata Miki

タイトルの COMODO の意味通り、住民である若い女性3人が共有する時間と1人の時間を楽に気ままに過ごすことのできるシェアハウスを目指して設計を行った。個室の位置を変化させた配置計画は、3人それぞれのライフスタイルを尊重し、1人の時間を充実させることを目的とした。空間に段差をつけることで外から中への空間の役割の移行を表し、内部空間をよりプライベートな空間とした。玄関横の棚は住民3人が夢中になっているものを飾るためのものであり、3人それぞれの感性と好みを大切にするためのスペースであると同時に、来客に向けての発信の場ともなる。住民3人がそれぞれの時間を気ままに過ごしつつ、一緒に過ごす際にも1人で過ごす際にもお互いの好きなことを共有する場としてこの住宅が成長することを期待する。

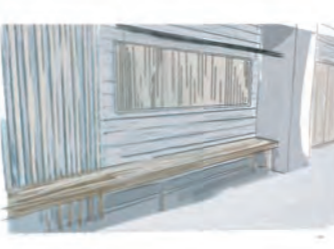
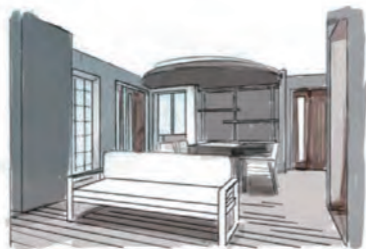
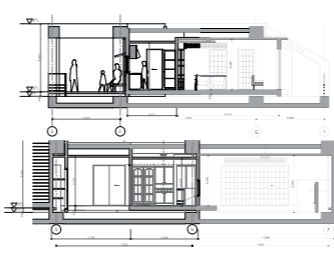
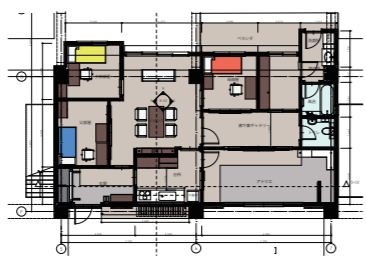


## ベンチのある家

-ベンチと台所でイデオバタカイギ-

太田 実里 / Ota Minori

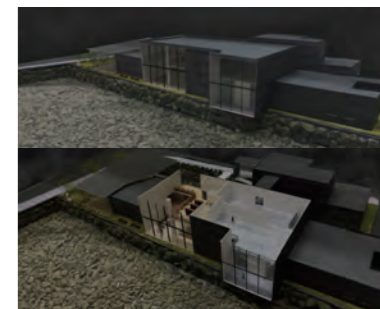
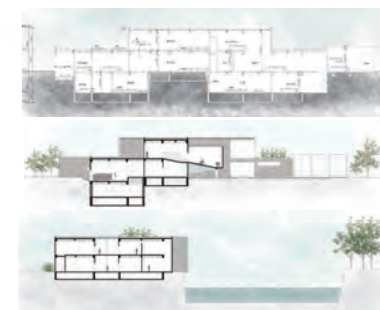
集合住宅のリノベーションを行い、共有スペースを持った住宅設計を行った。近年、隣人同士のつながりが希薄化しつつあるため、関係を築ききっかけの場を作るためにこの設計を計画した。南側には共有廊下があるため、台所を設置した。通行人と顔を合わせることで、ベンチがあることで境界線の領域を広げることが可能とした。また、アトリエは時間帯に合わせて開閉出来ることで、プライベートとパブリック空間の共存を図った。住宅スペースは、家族が個人で過ごす場と共に生活する場のバランスを考慮し設計した。生活機能の空間と趣味の部屋の配置を、使う人物の行動をデザインし構成し、人がとどまり自然に集まるような住宅を設計した。



## 時の憩い

石井 淳希 / Ishi Junki

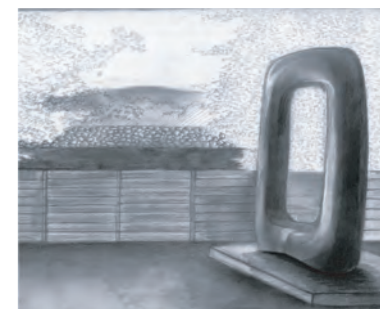
この美術館は東側の岡山城天守とその堀、西側の前川國男設計、林原美術館の境界を隔てるように建つ。美術館という大きなボリュームが日常化した岡山城の風景を遮断し、新たなシークエンスを生む。美術館の展示エリアでは展示室と移行空間と呼ばれる風景を眺める空間が繰り返すように展開することで、訪れた人々は移り変わるシークエンスを体感しながら進む。また境界を隔てる美術館として堀の石垣と水に着目し、アプローチまで延びた水盤とスレートで仕上げた外壁によってその形態を建築へ落とし込んだ。それに加え、スレートを岡山城天守閣と同じ黒色とすることで、岡山城と向き合い、呼応するだけでなく周辺の風景と馴染む落ち着いた印象とした。時が憩うように時間の流れを忘れ風景画に没頭する、そんな美術館を目指した。



## 蔵 - 守り守られる石の家 -

橋本 七海 / Hashimoto Nanami

敷地東側には400年の歴史がある石垣があり、この石垣に着目して積層というコンセプトのもと美術館の計画を行った。機能に分けて3つのレイヤーを平面上に配置し、その周りに美術館職員用の庭と地域の人と来館者が交流できる庭を設けた。周辺に溶け込みつつ、存在感もあるデザインを目指し、美術館を低層とすることで境界線を感じない連続のある外観とし、外壁は、岡山城の色に寄せて焼杉を使用する提案となっている。常設展示室では各展示室に1つずつ作品を展示して、イサムノグチの晩年の7つの作品を鑑賞できる計画を行った。そのうち第5展示室は、半屋外の展示スペースとなっており、イサムノグチの代表作である「エナジー・ヴォイド」を外の風景と一緒に鑑賞することが可能である。



## 都市につながる自然に住まう

### 空と森で暮らす

高田 実希 / Takata Miki

六甲山のケーブル・六甲山上駅から歩いて1分の場所に、集合住宅、畑、グランピング施設、貸しオフィスを1つにした複合施設を計画。自給自足を掲げ住民が学び、住民自らが管理・運営を行う敷地内施設の管理システムを確立させた。集合住宅を核としつつも住宅棟の周囲の空中歩道やテラスなどにスペースを設け、誰しもを迎え入れ誰もが心地よく過ごすことのできる空間とすることで、観光客の多いこの場所での居場所を増やすことで、より長くより充実した時間を過ごすことを期待した。各施設の周囲には高い木々が聳え立ち、夜には木々の隙間から美しい星空を眺めることができる。敷地内で建築を完結させるのではなく、六甲山観光の一拠点としてこの建築が機能し、将来的な六甲山・摩耶山一帯の観光事業の活性化を期待する。



### Art Beginnings

石橋 陸人 / Ishibashi Rikuto

本計画敷地は兵庫県、神戸の街並みを一望できる六甲山の頂上に位置する。深い木々に囲まれるこの土地は落ち着きがあり、どこか神秘的である。そして六甲山では芸術活動が活発であり、付近では芸術祭も行われている。創作という行為にとって重要なことは、感覚を研ぎ澄まし、集中し、思考を巡らせることだが、本計画敷地こそ創作活動の場にふさわしいと考えた。そしてコロナ後の「ある程度の距離」が必要な今の時代は、アトリエのようなプライベートな空間が必要な芸術家にとって最適だと考え、私はこの場に、「創作活動を行うアーティストの拠点となる場」を提案する。アトリエ棟では彫刻、絵画、執筆など様々な芸術活動を行うことができる。また頂上には西洋の修道院から着想を得た思索の場を設け、アーティストのイメージネーションを引き出す。



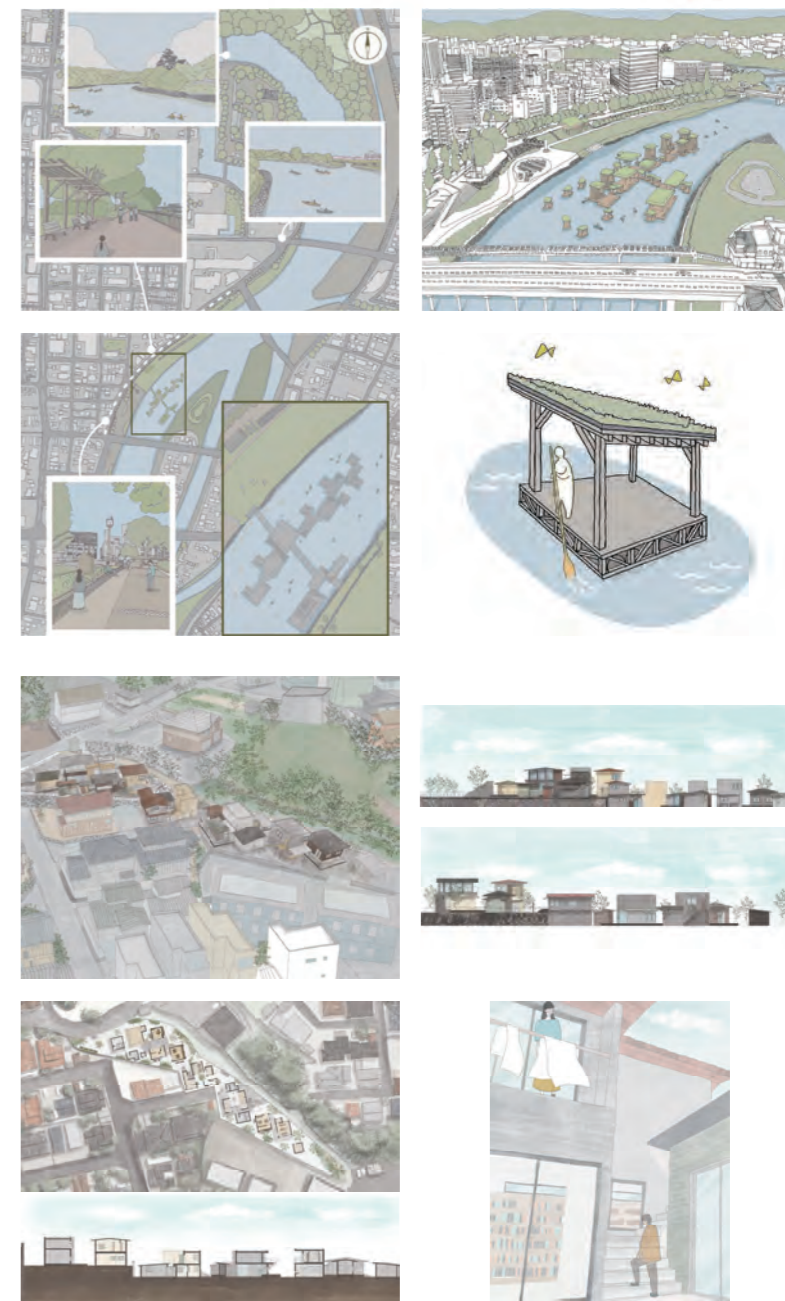
## 都市のヘタ地 or ヘタ建築 × 用途の時間割・複合化によるエリア再生

旭の筏  
-スローツーリストを呼び込み、新たに生まれるコミュニティスペース

橋本 七海 / Hashimoto Nanami

敷地は、江戸時代に岡山城の玄関口として賑わいがある場所であったが、現在は人通りが少ない。この場所にスローツーリストと地域の人の居場所づくり及び地域の文化を様々な体験から楽しめるスローツーリスト向けのプログラムを提案し、再生計画を行った。計画地は、河川敷と旭川と中洲が含まれ、旭川に提案した建物は、コテージやオープンキッチン、小さな集会所、カヌー倉庫などにより構成されている。河川敷には、管理棟兼地域の人の休憩スペースがあり、中洲はオープンガーデンとし、地域の人とスローツーリストが野菜を育てながら交流できる場所となっている。旭川に浮かぶフローティング建築は、水位の変化に対応し、屋上緑化や雨水の浄化と中水再利用システムにより、環境にも優しい建物となっている。

使いにくい土地として残っている場所や、初期の用途として使われず放置されている建築を、現代的な用途とともに、用途の時間割・複合化の手法を用いて再生することで、近隣エリアの暮らしの質を上げる計画を求める。



明日も会えるかな、  
一地域に寄り添った新しい集会所のかたち

石井 淳希 / Ishi Junki

敷地は倉敷市中庄、中庄駅南に位置する細長いへた地である。この敷地周辺は様々な年代の人が活動する場であるのにも関わらず住民や地域の人との間の交流は十分に行われていない。また中庄に限った話ではなく、全国的に昔のような近所さんとの交流が行われなくなってきているように感じる。そこで私は昔のような交流を取り戻し地域に賑わいをもたらす新たな複合型集会所を計画した。敷地内に、集会室、コインランドリー、ライブラリー、ワークスペース、シェアキッチン、工房、住宅の機能を持った各ボリュームを近づけて配置することで、歴史的街並みにもあるような路地空間を模倣した空間を作り人の距離を物理的に近づけ、交流を促す。また形状、色など建築としての要素は周辺の街並みを引き継ぐことで、中庄の街を連続させ街に溶け込むデザインとした

2023年度

# 建築プロジェクト演習

about this class

memo

この授業は、

- ・ 3年の通年授業
- ・ 地域固有の課題に関するプロジェクトについて、グループで提案を行う
- ・ 参加するプロジェクトを選択

プロジェクトごとに活動

- ・ 2月に最終発表

最終発表会の様子



## 4つのプロジェクト

NBR ガーデンプロジェクト 担当：向山先生

浅口市古民家の活用・改修提案 担当：津田先生・吉田先生

学生不動産一表町商店街活性化プロジェクト 担当：畠先生

福山市鞆の浦「鞆銀座商店街」から考える「にぎわい」のデザイン 担当：穂苅先生



1 project

## NBR ガーデンプロジェクト



NBRとは

身体と精神の能力を発達させるための支援的環境を提供すること

本学のNBRプロジェクトテーマ

「若い世代の心の居場所」の提供



自然と繋がり、癒されるような心の拠り所になる

NBR ガーデンを作る

ガーデンには2種類のベンチをデザインする

2 project

## 浅口市古民家の活用・改修提案

新しい提案



心地良い土間空間が際立つ空間づくり

3  
project

# 学生不動産 —表町商店街活性化プロジェクト—

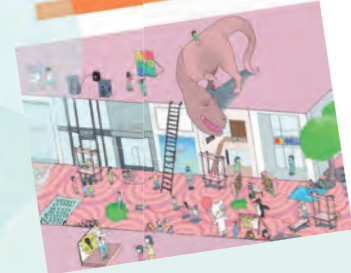
## 活動内容

良品計画が参入するイベント「つながる市」の  
店舗のレイアウトや企画運営へ参加

「表町商店街を楽しむためのアイデア」を  
募集して、模型やイラストとして形に



表町商店街  
を楽しむ64  
のアイデア



4  
project

# 福山市鞆の浦「鞆銀座商店街」から考える 「にぎわい」のデザイン

## 活動内容

地域住民の方へのインタビュー  
ねおえんだらーのデザイン

「とも子ども商店街」の開催

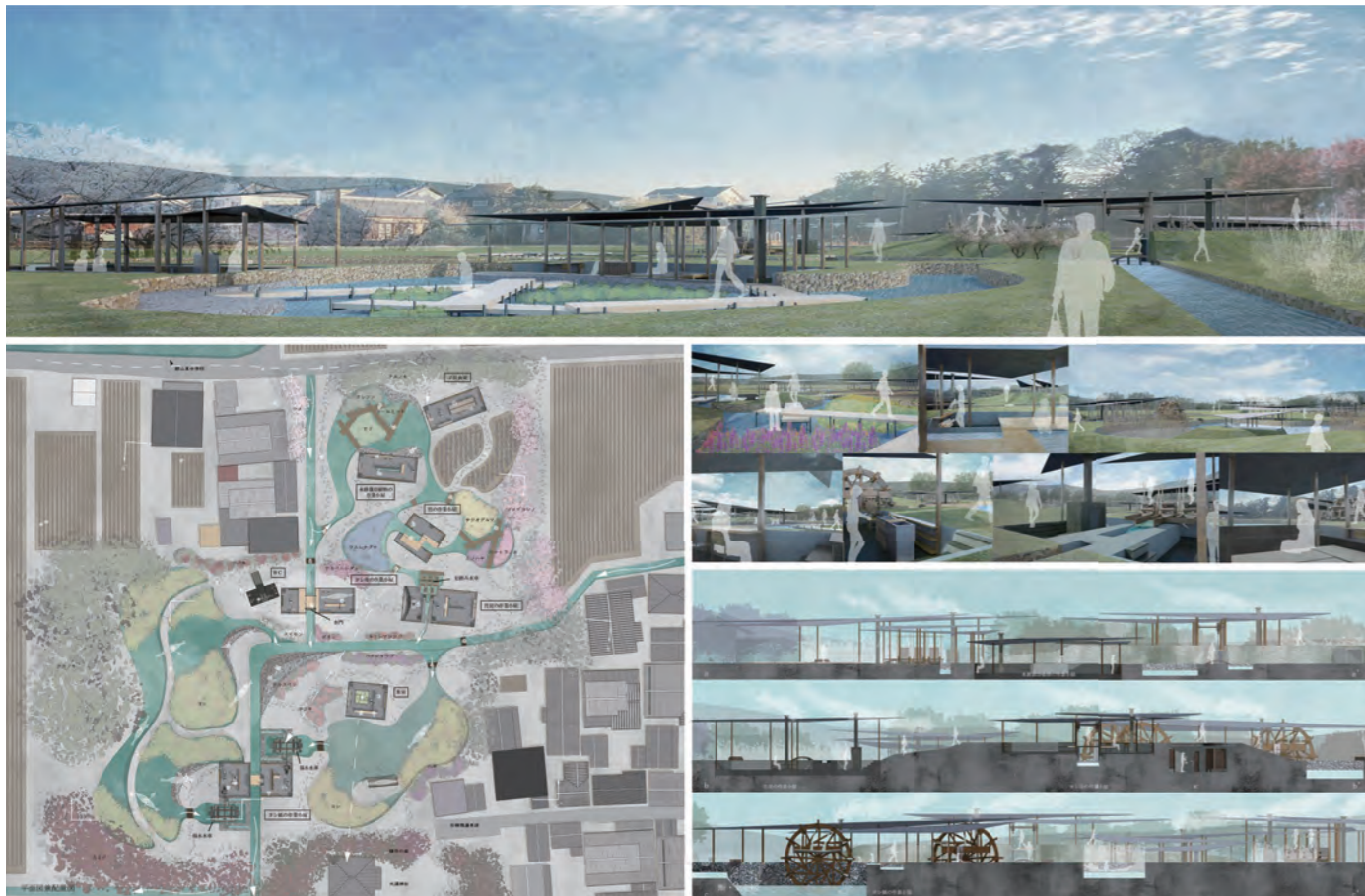


# 行雲流水

大和郡山市若槻環濠における浄化施設計画

岡本 有沙 / Okamoto Arisa  
向山 徹研究室

奈良県大和郡山市には、集落の周囲に堀を巡らせた環濠集落が多く分布している。環濠は利水の観点と治水の観点から住民に利用されてきたが、水利・社会システムの変化により、近年では環境の価値や機能は低下し、歴史的な水環境として残されてきた環濠の将来的な消失が危ぶまれている。今回の計画では、循環・浄化を中心とし、自然/景観/産業/生活/教育/管理の全てが繋がった、水質浄化機能をもつ水辺空間を創出する。今までとは異なる環濠のかたち、自然の力と住民たちの手によって水を浄化する仕組みをつくり、その空間を環濠集落の住民が共同で機能させる。この敷地を起点とし、将来的に環濠全体に、そして全ての環濠が豊かなピオトープに変貌していく広がりや生まれる。この変貌により、人々の環濠に対する保全意識が目覚める。この計画は、100年後の環濠の新しい在り方を示す計画である。

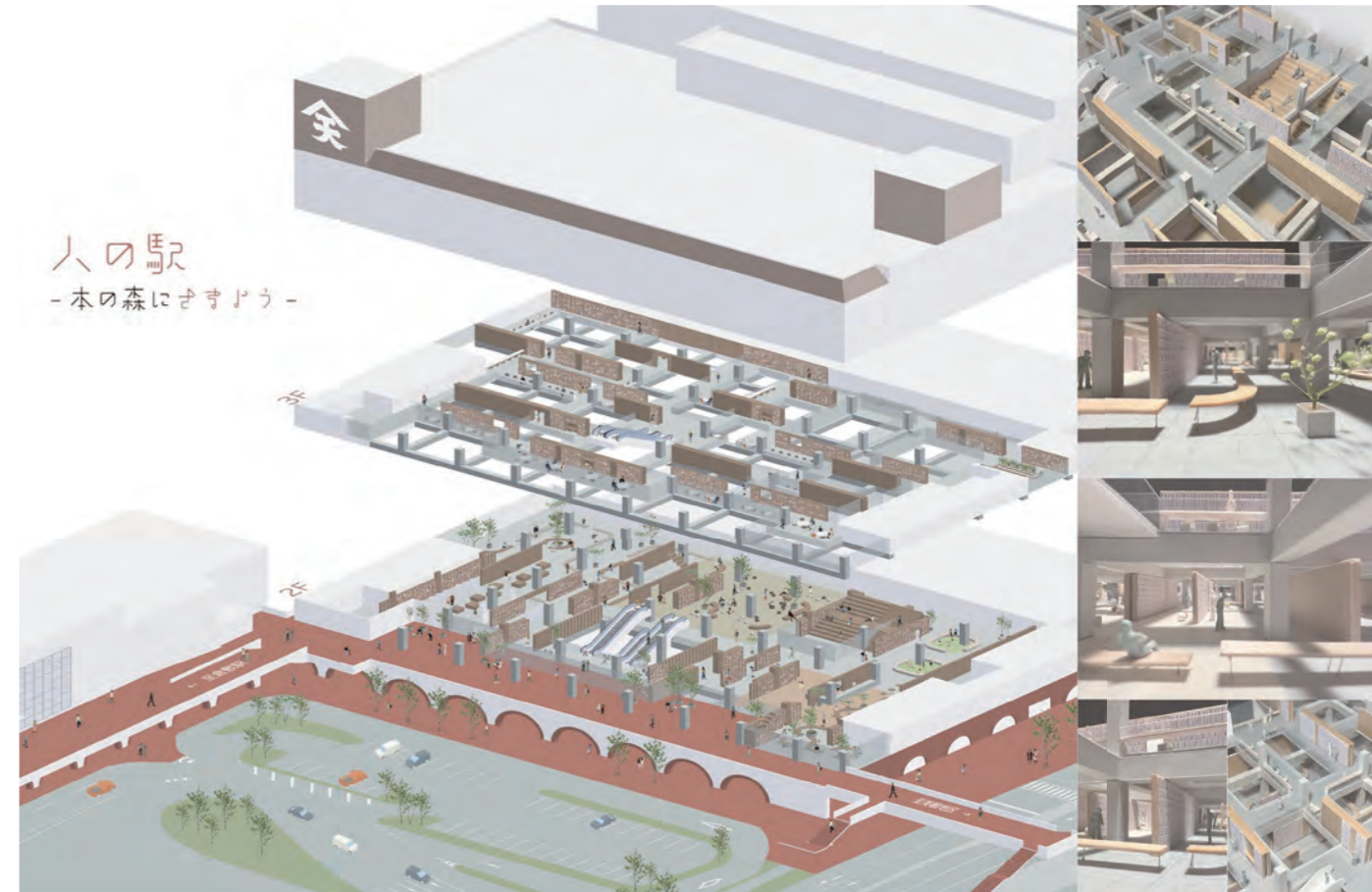


# 人の駅

本の森にさまよう

河村 南 / Kawamura Minami  
吉田 豊研究室

現在の社会では、自宅と職場の往復の日々により心にゆとりが少ないように思える。また、自宅と職場の間である駅付近では、建物が建ち並びゆとりとなる空間的余白がない。そこへ、心のゆとりとなる拠り所「人の駅」の提案。敷地は、岡山県の倉敷駅南口に直結する天満屋。天満屋は賑わいが低下しており空洞化になりつつある。空洞化になりつつある天満屋の一部を改修し図書空間にすることで人と情報が交じり合い、視線の向きをずらしながら全体を交じり合わせることで本の森にさまようような空間をつくり出した。この空間では、電車や人を待つ人、何かをする合間のついでなど駅の待合場となり、ここで何をするのか限定するのではなく自分で居場所を探すことで心のゆとりとなる拠り所「人の駅」となる。



# Fuuga

バッハの作曲理論から着想を得た公共空間の設計

谷 麻希 / Tani Maki  
岡北 一孝研究室

岡山県倉敷市は、江戸時代から地域住民の主体的な行動と行政との連携によって町並みを維持してきた歴史を持つ。人口減少により地域コミュニティが減少していくなかで、街の価値を保ち続けるためには、街と関わろうとする人を増加させることが必要である。そこで観光客すら一時的な市民と捉え、地域住民との関わりを生み出す図書館機能をもつ公共空間の設計を行う。観光客にとって一度きりの目的地から、関わり続けたい場所へと変化させるとともに地域住民の市民としての誇りを醸成したい。形態操作は独立した複数の旋律を同時に重ね合わせて楽曲を構成する音楽技法である対位法の一つ、フーガから着想を得た。音楽を形態に落とし込むことにより、音楽と建築に共通する時の流れを体感できる。また、多様な場所が求められる中で、異なる場所で違うことをしていても同じ旋律で一体となれる場所を提案する。

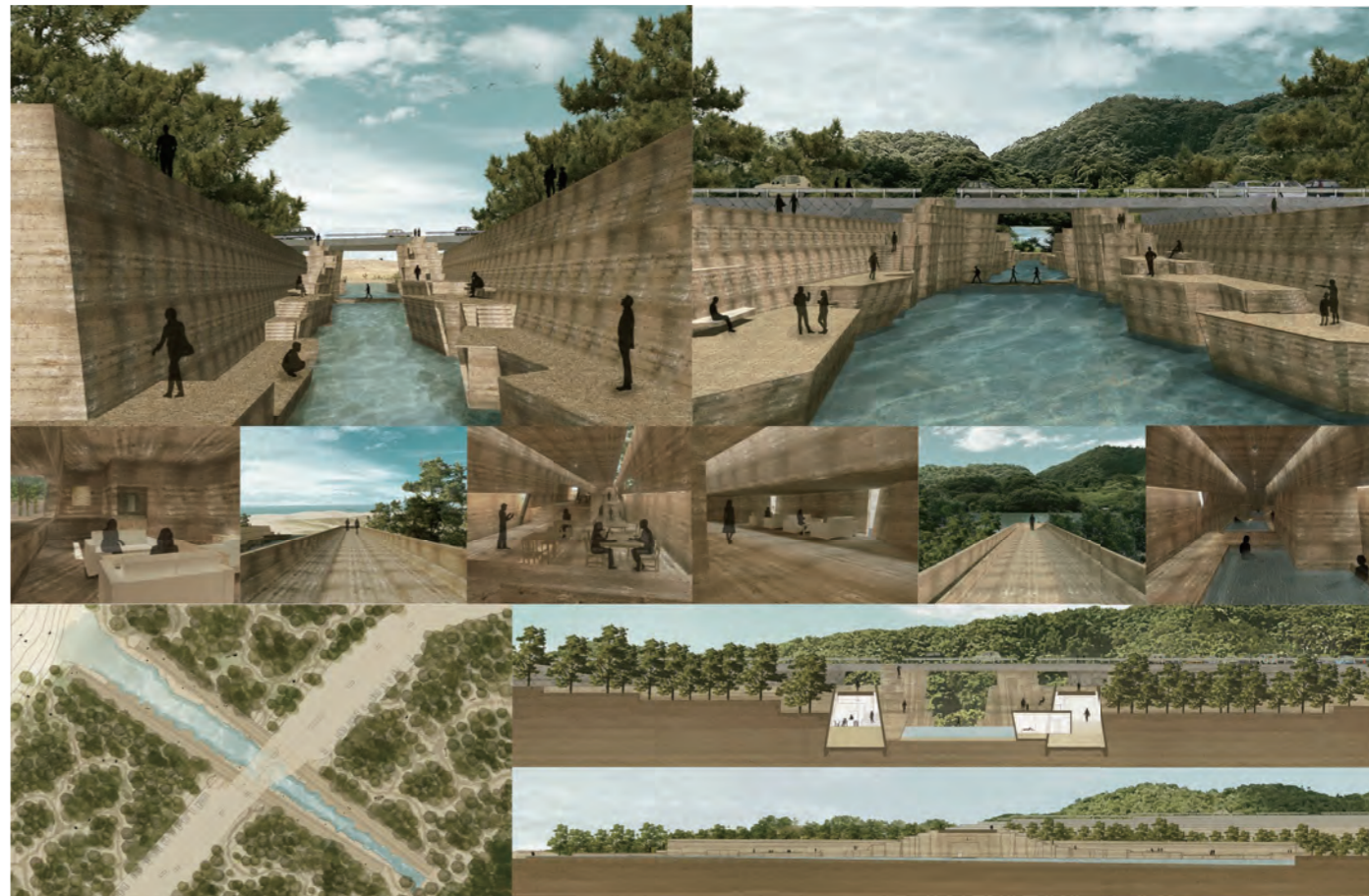


# sand and water

鳥取砂丘周辺のテリトリーを感じ取る宿泊施設の計画

中井 花玲 / Nakai Karen  
向山 徹研究室

砂と風が織りなす雄大な景観から、有数の観光地として認知されている鳥取砂丘の南方には、砂丘の砂によって水が堰き止められ生じた『多鯨ヶ池(たねがいけ)』が存在する。かつては湖畔まで砂が浸食し両者はひと繋がりであったが、砂防林の植林などをきっかけに二つの領域を分ける新たな境界が生まれた。本作品では、この砂防林に覆われた境界線上に、切り離された「砂」と「水」の二つの領域をもう一度繋ぎ、鳥取砂丘周辺のテリトリーの潜在的な美しさを引き出す宿泊施設の提案を行う。砂丘と池に向かって直行方向に並ぶ二つの宿泊棟の間には、土地の記憶を想起させる砂と水が混じり合う水辺空間が展開する。特徴的な壁の内側の凹凸は、土地の高低差に対応するように張り出している。そこが一つの階段、また宿泊室となる。さらに屋根上の展望台からは、砂丘、池、砂防林、そして澄み渡る空へと視界が広がっていく。





# 過去からの証言 未来への提言

島の記憶を未来に遺すための建築

廣瀬 みのり / Hirose Minori  
西川 博美研究室

美しい瀬戸内の海に、忘れてはならない記憶が刻まれた島がある。全国13箇所のうち2箇所の国立ハンセン病療養所がある“人権の島”岡山県の長島である。“人間回復”の橋、邑久長島大橋の開通を経て現在に到るまで、多くの入所者の方々がこの島で暮らしてきた。国の隔離政策により、この島に強制収容された人々の生きた証を、真実の歴史を風化させてはならない。約1kmにわたる歴史廻廊とそこに付随する造形は、入所者の辿った人生の出来事を抽象化、数値化したものから構築した。ここに訪れた人々は、建築の形態や光の操作から島の記憶を体感する。患者棧橋から上陸・隔離され、島が終の棲家となり、火葬場で亡くなるまでの人生を辿ることで、ハンセン病の正しい理解と、現代ある差別・偏見に対して、考えるきっかけになることを願う。



# 皮革の栞

高木地区における皮革産業の伝承と発信

八杉 凧咲 / Yasugi Nagisa  
吉田 豊研究室

私たちが普段から身に付けている鞄や靴には革製品が多く使われている。ある日、私の地元である姫路市の地場産業の一つが皮革産業であると知り、皮革について調べる中で高木地区に辿り着いた。この地区には1,500年以上の皮革最古の歴史があり、日本における“革発祥の地”という伝承が残っている。最盛期は地区全体が皮革で溢れていたが、現在は衰退の一途、廃工場が建ち並ぶ。同時に、工場・働く人(皮革関連)・私たち(地元の人、観光客、皮革を知らない人)の三者の関係性が薄れつつある。そこで、皮革のことをより多くの人に知ってもらいながら、その魅力を発信し、高木地区と皮革産業がもう一度賑わいを取り戻すための第一歩として、廃工場を再生・改修した新たな空間を提案する。従来の閉じた工場から見せる工場に、併せて見学ルートや工房を設けながら、私たちが皮革を五感で体感することのできる場とする。



## 湯気をはく台地

湯之元温泉における温泉文化の継承と地域コミュニティの場の提案

山尾 笑生 / Yamao Emiki  
西川 博美研究室

鹿児島県西部に位置する日置市に湧く湯之元温泉と呼ばれる温泉地がある。江戸時代から続く温泉地で、漁業や農業で疲れた人々の体を癒す湯治場として多くの客が訪れ歓楽街として賑わっていた。しかし、家庭に浴室が設けられた現在、日常的に温泉に通う人が減っていることが現状で、当時の面影は薄くなってしまった。そこで、立ち寄り風呂の割合が多いという湯之元温泉の特徴を活かした、温泉に通うという行動が体験できる湯治施設と、地域の人々の健康増進の場や気軽に立ち寄ることができる場所を計画し、湯治客と地域の人々が交流するような仕組みを提案する。さらに、この土地の特徴であるシラス台地の形状を建築に取り入れたり、地域の資源である温泉の湯気を活用したりし、この土地の風土に馴染んだ地域の人々が親しみを持つことのできるような建築の形状を目指した。

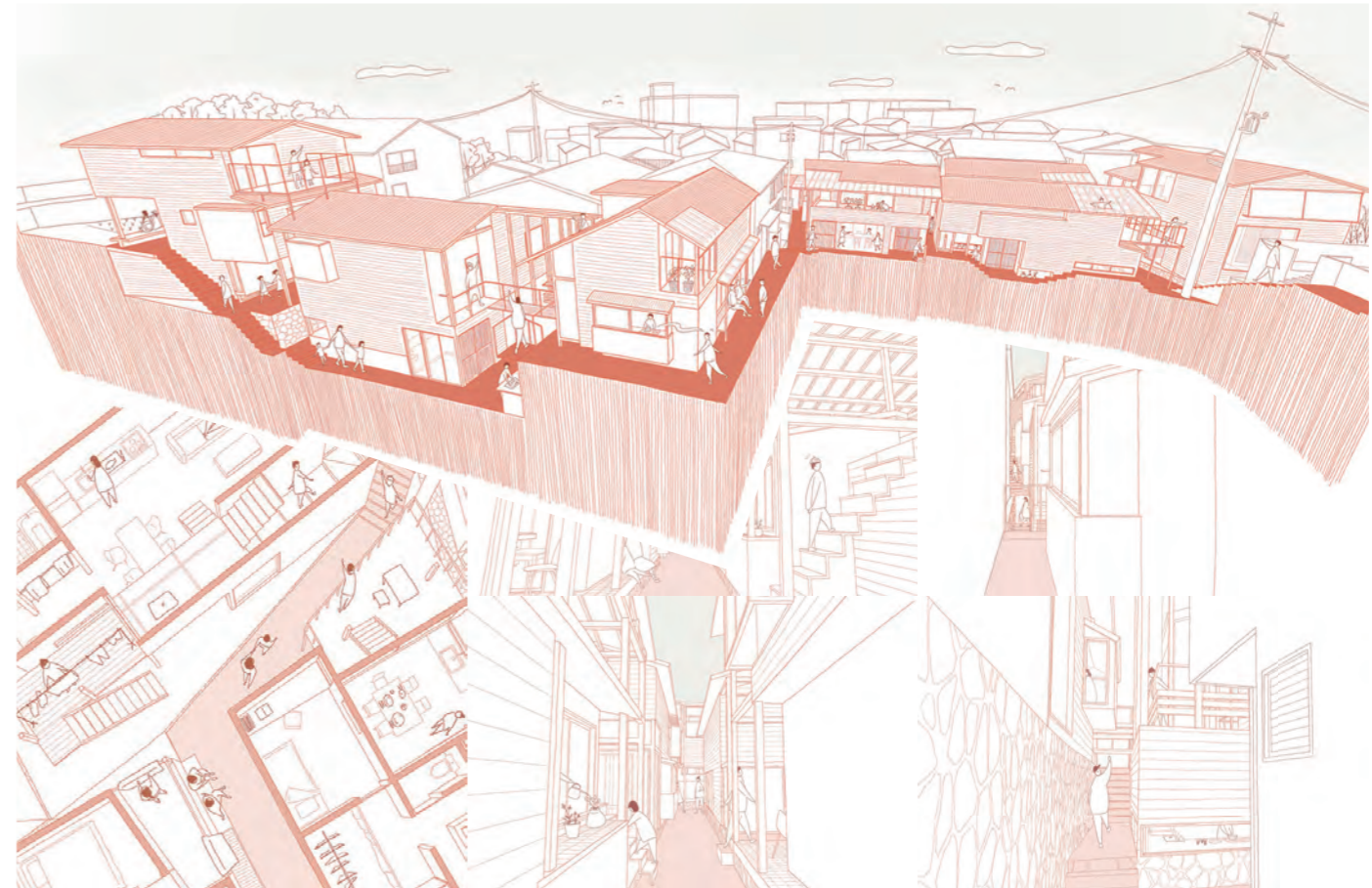


## 道、ときどき余白、そして交流、

住宅密集地における新たな住居形態の提案

渡辺 珠羽 / Watanabe Miu  
吉田 豊研究室

近年、接道義務によって減少しつつある路地空間。敷地境界によって無意識に構築された壁、住宅地に介入する広い道は、住宅同士の距離を離し、私たちの暮らしをまちら閉ざす要因となっているのではないか。そこで、人々の生活が溢れ出した路地に囲まれ、境界が曖昧にされた住宅密集地の暮らしについて再考する。愛知県にある篠島には、住宅密集地とその隙間を縫うように延びる細い道が存在する。島民はかつて敷地を譲り合い、敷地境界線上にセコ(道)を作ることで住宅密集地を形成してきた。それによって生まれた独自の共有意識によって特徴的な屋外空間が構築されている。しかし、近年あらゆる問題によって島の景観は失われつつある。本計画では、島民の屋外空間に対する考え方や既存の地形・建物から、敷地の枠にとられない住居構築システムの再建と、世代間の交流を促す、新たな形態をもった篠島の住居群を提案する。





# 建築サロン

～建築サロンの目的～

学年を跨いだ上下の繋がりをつくる！

建築学科ならではの活動に取り組む！

他大学や高校生にも県大の建築学科を知ってもらおう！



## 幹事メンバー

1年	2年	3年	4年
河本 和樹 Kazuki Komoto	谷岡 優希 Yuki Tanioka	安食 翔太 Shota Ajiki	八杉 凧咲 Nagisa Yasugi
後藤 麻里加 Marika Goto	本行 千夏 Chinatsu Hongyo	上田 なつめ Natsume Ueda	渡辺 珠羽 Miu Watanabe
北林 歩実 Ayumi Kitabayashi	森安 野土香 Nodoka Moriyasu	太田 実里 Minori Ota	
中塚 光咲 Misaki Nakatuka	森岡 輝成 Terushige Morioka	川上 皓照 Hikaru Kawakami	
藤原 梨々子 Ririko Fujiwara			

## 年間行事

- 4月 新入生歓迎会
- 5月 お茶会  
球技大会
- 6月 コンペ説明会
- 7月 コンペ募集、チーム分け
- 9月 [夏季] 建築レクチャー+講評会  
流しそうめん
- 1月 初詣  
球技大会
- 2月 卒制後立食パーティー
- 3月 [冬季] 建築レクチャー+講評会

Apr.



May.



Sep.

Jun.



Mar.



サロンミーティングの様子



4年生のお二人の卒業式!

2023

9.21 THU

ゲスト 株式会社ツバメアーキテクトゥー級建築士事務所  
山道 拓人 様 千葉 元生 様



講師

quest lecturer

ツバメアーキテクトゥ

NAME

さんどう たくと  
山道 拓人 さん

1986年 東京都生まれ  
2011年 東京工業大学大学院修了  
2013年 ツバメアーキテクトゥ設立

NAME

ちば もとお  
千葉 元生 さん

1986年 千葉県生まれ  
2012年 東京工業大学大学院修了  
2013年 ツバメアーキテクトゥ設立

学生プレゼンテーション

- 【2年前期 住宅】井本海希「Hugにつつまれて、自分と向き合える居場所」 永野絵里「自然と暮らす家」
- 【2年前期 保育園】河村春菜「すくすく保育園」 小室彩音「タテとヨコに繋がる保育園」
- 【3年前期 SI住宅】高田和樹「402住戸 くつろぎの家」 高田実希「402号室 COMODO HOUSE」
- 【3年前期 美術館】石井淳希「時の憩い」 太田実里「境界線に浮かぶ美術館」 橋本七海「蔵 守り守られる石の家」



主催 建築サロン

2023年度 前期・後期

建築レクチャー & 合同講評会

2024

3.11 MON

ゲスト 株式会社和田デザイン事務所 和田 優輝 様

講師

quest lecturer

NAME

わだ ゆうき  
和田 優輝 さん

1978年 東京生まれ  
2002年 早稲田大学大学院修了  
2008年 妻の故郷の岡山県津山市に1ターン  
2013年 (株)和田デザイン事務所設立  
2022年～ 自身の故郷東京と津山の2拠点で活動

学生プレゼンテーション

- 【2年後期 まちの駅】小原凜「まちのみち」 永野絵里「雨降るやどり」
- 【2年後期 幼老複合施設】川口葵「まちのみち」 小室彩音「そうじゃ、見守りの場」
- 【3年前期 ヘタ地再生】石井淳希「明日も会えるかな、」
- 【3年前期 六甲山活用】石橋陸斗「Art Beginnings」 高田実希「空と森で学び、暮らす」





3年 太田実里さんの  
デザイン



Instagramでも  
学生の活動記録を  
ご覧ください！

岡山県立大学

デザイン学部建築学科

機関紙 KEN KEN vol.2

2024年3月発行 非売品

編集：岡山県立大学

デザイン学部 建築学科

建築サロン 機関紙編集委員

発行：岡山県立大学

デザイン学部 建築学科

〒719-1197 岡山県総社市窪木 111

TEL：0866-94-2111 FAX：0866-94-2196

URL：https://www.oka-pu.ac.jp

印刷：株式会社グラフィック

URL：https://www.graphic.jp

## 編集後記



2冊目の発行となる岡山県立大学建築学科の  
機関紙「KEN KEN」を  
ご覧いただきありがとうございます。

2回目となる冊子編集では  
前回の冊子を完成させたメンバーを中心に  
作り上げました。

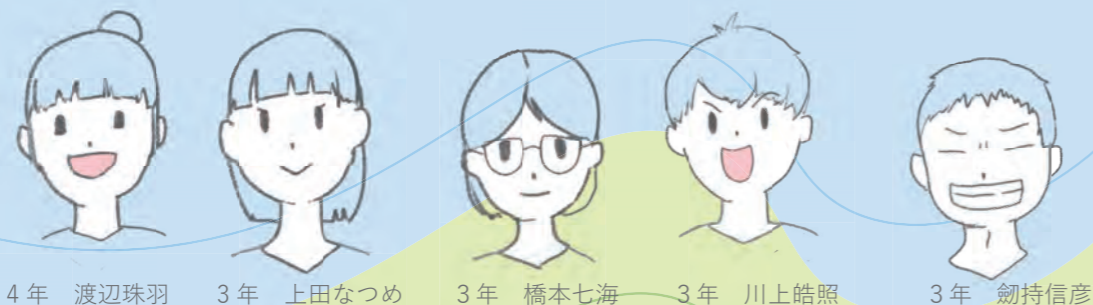
建築サロン立ち上げから2年、  
様々な活動や季節のイベントを経て、  
建築学科内での繋がりが  
より強まったように思います。

それと同時に残したい記憶、  
印象的な思い出も増え、  
この冊子の厚みも増しました。

この冊子が  
学生時代の活動の記録かつ  
その先の人生において  
温かな思い出になることを祈っています。

KEN KEN制作にあたり、  
ご協力いただいた皆様に感謝の意を表します。

## 編集メンバー



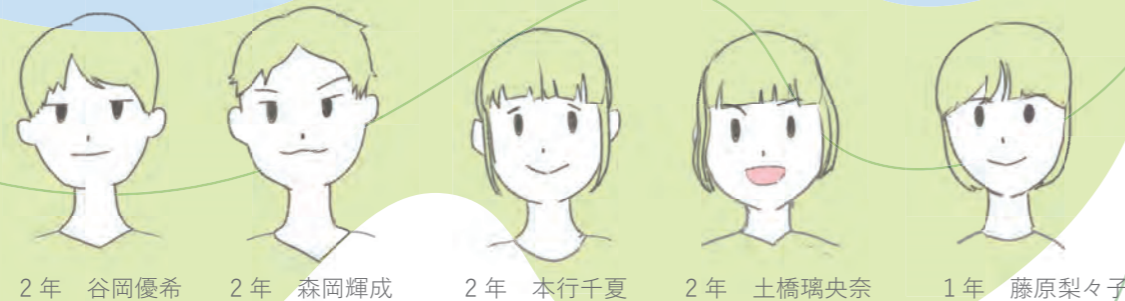
4年 渡辺珠羽

3年 上田なつめ

3年 橋本七海

3年 川上皓照

3年 劔持信彦



2年 谷岡優希

2年 森岡輝成

2年 本行千夏

2年 土橋璃央奈

1年 藤原梨々子

津田 勢太 Seita Tsuda

建築構造

福濱 嘉宏 Yoshihiro Hukuhama

日本建築史 建築構法計画

吉田 豊 Yutaka Yoshida

建築設計、建築意匠、建築史（近代西洋）

向山 徹 Toru Mukouyama

建築設計、建築歴史・意匠、建築計画

西川 博美 Hiromi Nishikawa

建築設計・都市史（主に台湾）・保存・再生・まちづくり

穂苅 耕介 Kosuke Hokari

都市・地域の保全・再編、まちづくり

岡北 一孝 Ikko Okakita

西洋建築史、建築の保存・再生

畠 和宏 Kazuhiro Hata

建築計画、建築設計

原田 和典 Kazunori Harada

建築環境工学、建築音響

## 教員一覧